

修士論文（要旨）

2010年1月

アサーティブな行動と青年期友人関係における親密性との関連

指導 井上 直子 准教授

国際学研究科
人間科学専攻 臨床心理学専修

208J5010

川口 満希

目次

I. 問題

- 1、 青年期友人関係における親密性
 - 1) 青年期の発達課題・特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
 - 2) 青年期の友人関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
 - 3) 親密性の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
 - 4) 現代の青年の友人関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- 2、 アサーティブな行動・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 3、 アサーティブな行動と青年期友人関係における親密性・・・・・・・・・・5

II. 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

III. 方法

- 1、 調査対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
- 2、 調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
- 3、 調査内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
- 4、 調査時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

IV. 結果

- 1、 友人とのつきあい方の傾向・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
- 2、 友人に対する良好度と感情的側面・・・・・・・・・・・・・・・・11
- 3、 友人に対する良好度と自己表明の程度・・・・・・・・・・12
- 4、 友人に対する感情的側面と自己表明の程度・・・・・・・・14
- 5、 友人とのつきあい方の傾向と友人に対する良好度・・・・・・・・14
- 6、 友人とのつきあい方の傾向と友人に対する感情的側面・・・・15
- 7、 友人とのつきあい方の傾向と友人に対する自己表明の程度・・・・19

V. 考察

- 1、 青年期友人関係における親密性
 - 1) 友人とのつきあい方の傾向・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
 - 2) 友人との関係の良好度と感情的側面・・・・・・・・・・24
 - 3) 友人とのつきあい方の傾向と親密性・・・・・・・・・・24
- 2、 アサーティブな行動と青年期友人関係における親密性との関連
 - 1) 友人との関係の良好度、感情的側面と自己表明の程度・・・・25
 - 2) 友人とのつきあい方の傾向と自己表明の程度・・・・・・・・26
- 3、 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
- 4、 よりよい友人関係を促すための援助への示唆・・・・・・・・28
- 5、 今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

VI. 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

| | |
|------|----|
| 謝辭 | 29 |
| 引用文獻 | 29 |
| 資料 | 32 |

I. 問題

青年期は、それ以前の発達課題を通過して出来上がったパーソナリティの各部を、さらに強化、結合、合成し、パーソナリティの変容を行う時期である(小此木、1980)。青年にとって友人関係は精神的な健康を維持し、自我を支え、対人的スキルを学習させ、生き方の指標を与えるモデルとなる(松井、1990)。よって、青年にとって親密性の高い友人関係を築くことは重要であると思われる。

現代の大学生は友達と表面的に楽しくつきあうことは得意だが、友達に対して過度に気を遣い、自分の気持ちを伝えることは苦手であることがしばしば指摘されている(岡田、1995、2002)。保坂(1996)は、他者との違いを言うこと、あるいは言われることは、攻撃と同じ意味になってしまうと述べている。

このような青年にとって、「主体的に相手も自分も大切にしたい自己表現」(平木、1993)ができるようになることが親密性を築いていく上で重要ではないかと思われる。平木(1993)はこのような自己表現の在り方としてアサーションという概念を紹介している。アサーティブな自己表現が行われている場合、その対人関係は自他尊重的で良好なものであり、全人的な自己開示により親密性の高い関係へと展開すると考えられる。

本研究では、友人関係をより立体的に捉えるために、友人とのつきあい方の傾向という視点と友人に対する感情という視点に加え、本人が友人にどのように思われていると認識しているかという3つの視点から友人関係の性質を捉えることを試みる。これらの視点を総合することによって、アサーティブな行動が友人関係の親密性とどのように関連するかを、より立体的に捉えることが可能となると考えられる。

II. 目的

本研究では、アサーティブな行動と青年期友人関係における親密性との関連を検討することを目的とする。また、よりよい友人関係を促すための援助課題を明らかにすることを目指す。

III. 方法

私立大学に通う大学1・2年生282名を対象に、質問紙調査を実施した。使用した質問紙は以下の通りである。①友達とのつきあい方に関する尺度(落合・佐藤、1996)、②対人関係の良好度に関する尺度(水野、1997)、③友人関係の感情的側面に関する尺度(榎本、1999)、④友人関係における自己表明に関する尺度(柴橋、2001)

まず、個人の全体的な友人関係のつきあい方の特徴を把握するために①を用いた。そのうえで、本研究の目的にしたがい、アサーティブな行動については④、特定の友人関係における親密性については②・③により測定した。

IV. 結果と考察

一般的な友人とのつきあい方の傾向に関して、本研究においても、落合・佐藤(1996)と同様に類型A[深く広く]、類型B[深く狭く]、類型C[浅く広く]、類型D[浅く狭く]の4類型に分けられた。そのうち、類型Aが最も友人との関係に満足しており、友人から受け入れられているという親密さを感じていることが示唆された。しかし、同時に友人に

対する不安や懸念を感じていることが明らかになった。本研究では、大学に入ってから友人に関して尋ねており、友人との関係が比較的浅い段階であると思われる。よって、不安や懸念を持ちながらも、多くの友人との関係を構築していく段階にあると考えられる。

さらに、親密な関係では、「限界・喜びの表明」「意見の表明」「不満・要求の表明」が多いことが明らかになった。自分の気持ちや意見を率直に表現することで、情緒的な交流がなされ、互いのことを深く知ることができると思われる。よって、好意や肯定的な意見や気持ちを表現することが、親密性に寄与していると考えられる。つまり、困ったことやポジティブな感情を伝えたり、相手の良いと思ったところをほめることが親密性を獲得する一助となると思われる。一方、相手の要求を断ることは、直接的には親密性に寄与しないことが示唆された。相手の要求を断ることは、関係性の質によって変化するというのではなく、個人の資質や関係性の中の役割に関連するところが多いのではないかと考えられる。

このことから、友人関係の親密性を捉える際には、友人との関係だけでなく、個人の性格特性の影響も適切にアセスメントする必要があると思われる。

なお、このようなアサーティブな行動を支えるものとして、相手への信頼感や友人関係の捉え方が大きく影響していると思われる。本研究において、友人と狭くかかわるのか広くかかわるのか、深くかかわるのか浅くかかわるのかによって、友人への自己表現の程度が異なることが明らかになった。友人とどのようなかかわり方をしているのか、どのようなかかわりを求めているのかを知ることで、どこに焦点を当てて援助をするのが適切かを考える一助になると思われる。

VI. 今後の展望

自己表現は多ければよいとは、一概には言えない。状況や人に応じて臨機応変に自己表現の方法を変えていくことが望ましいと考える。しかし、本研究では、自己主張の程度や相手に対する配慮などについては扱っていない。また、自己主張の程度によって心理的な適応度に差異がみられるかを検討することで、より個人の特徴を捉えることができると考える。そうすることで、効果的な援助につながると思われる。

引用文献

- 阿部真由美 2007 大学生の友人関係におけるアサーションー「自己主張」と「他者受容」のバランスー 聖心女子大学大学院論集 **29(1)** 65-84
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究 **47** pp.180-190
- 平木典子 1993 アサーション・トレーニングーさわやかに自己表現>のためにー 金子書房
- 保坂亨 1996 子どもの仲間関係が育む親密さ-仲間関係における親密さといじめ 現代のエスプリ **353** 45-51
- 保坂亨・岡村達也 1986 キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究 **4** 15-26
- 近藤邦夫 1984 大学生の成長におけるグループ的接近 村瀬孝雄(編) 青年期危機の心理臨床 福村出版 pp.139-170
- 工藤領子・金子勲榮・池上貴美子・佐々木和義 2007 大学生におけるアサーションと友達とのつきあい方の関連 発達心理臨床研究 **13** 19-28
- 草柳千早 1991 恋愛と社会組織ー親密化の技法と経験ー 安川一(編) ゴフマン世界の再構成 世界思想社 pp.129-156
- 松井豊 1990 社会化の心理学ハンドブック 川島書店
- 水野邦夫 1997 対人関係における外向性の直接的効果について 聖泉論叢 **5** 63-75
- 中釜洋子 2005 親密な関係を築きそれを維持する 現代のエスプリ **450** 171-180
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究 **44** 55-65
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究 **43** 354-363
- 岡田努 2002 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究 **2** 69-84
- 小此木啓吾(編) 1980 青年の精神病理 **2** 弘文堂
- 大坊郁夫 1998 しぐさのコミュニケーションー人は親しみをどう伝えあうかーサイエンス社
- 柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究 **12** (2) 123-134
- 柴橋裕子 2004 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究 **52** 12-23
- 柴橋祐子 2005 青年期の人間関係におけるアサーションの意味 現代のエスプリ **450** 110-122
- 鈴木圭子 1997 青年期前期ー大学生を中心に 馬場禮子・永井徹(編) ライフサイクルの臨床心理学 培風館 pp.108-125
- 高橋均 2006 アサーションの規定因に関する研究の動向と問題 広島大学大学院教育学研究科紀要 **55(1)** 35-43